グローバル・スタディーズ　授業事例

1	公開授業実施日時	2018年11月20日（火）13:30～14:20/14:30～15:20
2	場所	京都聖母学院高等学校　理科教室　視聴覚教室
3	対象	1年　51名
4	授業者	川井　亮（国語）・岡本　幹（理科）　※導入：佐古　孝義（英語）
5	島名	グローバル・ヒストリー
6	単元名	古典を科学する
7	関連する教科・領域	国語科（古典）・理科（化学）・英語科
8	単元の目標・ねらい	古典：中古の時代に用いられていた鏡の概要を理解し，現代の鏡にどのように繋がるかを考察する。 理科：青銅鏡と現代の鏡を実際に作って比較する。
9	グローバル・スタディーズとしての目標・ねらい	古典では，古典文法・古文常識など国語で習う知識を活かし，文献の精緻な読解を通じ，「鏡」の社会・文化的役割の通時的比較を行う。また，西洋史に「鏡」が登場するエピソードなども紹介し，その役割の違いを共時的にも比較する。 理科では，青銅鏡と現代の鏡を実際に製作してみることで，古典で理解した内容を実際に「触れて」体感することで，その理解をより立体的なものにする。
10	単元の評価規準【教科・領域として】	・中古の人々にとって「鏡」はどのような役割を果たし，文献に書かれているかについて考察できたか ・現代の「鏡」の特性とその社会的な役割について考えることができたか を事後振り返りシートなどで定性的に評価する。
11	単元の評価規準【グローバル・スタディーズとして】	古典：「鏡」の果たした社会・文化的役割の通時的・共時的理解を比較文化的視点で行うことができたか 理科：鏡製作を通じてその理解をより深められたか を事後振り返りシートなどで定性的に評価する。
12	単元計画	古典の「徒然草」や「更級日記」に記載されている「鏡」をとおして，古典の世界を想像すると同時に「自己」を見つめ直す契機とし，自己理解や他者理解を行う。容姿を映し出すだけでなく，内面や異世界を考えるきっかけにもなり得た「鏡」の概要を理解するとともに，「鏡」がどのような場面で用いられてきたかを考え，古代と現代の「鏡」にかかわる材料や用途などの比較対照を行う。
13	本時の目標	普段の生活の中で欠かせない「鏡」の概要を知り，古の時代にどのような記述があり，どのように用いられてきたかを理解する。
14	本時の展開	≪別紙指導案を参照≫

15	グローバル・スタディーズとしての特徴	古典では，古典文法・古文常識など国語で習う知識を活かし，文献の精緻な読解を通じ，「鏡」の社会・文化的役割の通時的比較を行う。また，ヨーロッパ言語での「鏡」の持つ意味や，西洋史に「鏡」が登場するエピソードなども紹介し，その役割の違いを共時的にも比較する。こうした比較文化的視点を通じ，「鏡」が含意する，より形而上学的な機能，すなわち「鏡像を通じた自己・他者認知機能」にまで踏み込んで解説する。人はどのように自己と他者を認識するのか。人は鏡に映った像を見て自己を認知し，自己とはどのような存在であるかについて思索を深める存在であると言える。グローバル化の進む現代で，ともすれば自分が何者かを見失いがちになる危険性（アイデンティティ・クライシス）を孕んだ社会に生きる上で，アイデンティティー形成の根幹を正面から考え直すことは，まさにグローバル・スタディーズとしての喫緊の課題である。 理科では，青銅鏡と現代の鏡の対比として，青銅を実際に製作したり，銀鏡反応について学ぶ。古典で理解した内容を実際に「触れて」体感することで，グローバル・ヒストリーの理解をより立体的なものにする。
16	授業者から一言	「鏡」の果たした社会・文化的役割の通時的・共時的理解を比較文化的視点で行うとともに，「自己と他者を認識するとはどういうことか」という古典作品が問いかける課題に自分なりの答えを考えることができたといえる。このような合教科型授業の構築は，新学習指導要領の要請する「新しい学び」の形のひとつと言えるかもしれない。

「古典の世界を科学する」十一月二十日（火）　古典編

（　）年（　）組（　　）

●『古事記』

●『魏志倭人伝』

『更級日記』より

母、一尺の鏡を㋐鋳させて、えるて参らぬかはりにとて、僧をいだしたてて、初瀬にまうでさすめり。

㊟【母が、約30ｃｍほどの鏡を鋳させ、私を連れて参ることが出来ない代わりに、僧をかわりにたてて、初瀬（長谷寺）に詣でさせるようだ。】

いみじうけだかう、きよげにおはする女の、うるはしくさうぞき給くるが、たてまつりし鏡をひきさげて、

㊟【非常に気高く、清楚な女性で正装しておいでになる方が、奉納した鏡を手に提げ】

『この鏡を、こなたにうつれるかげを見よ。これ見れば、あはれにかなしきぞ』とて、さめざめと泣き給ふを見れば、㋑ふしまろび、泣きなげきたるかげうつれり。

㊟【『この鏡を、こちら側から見て映っている姿（未来の姿）をご覧なさい。これを見れば気の毒で悲しいことです』と言ってさめざめとお泣きになるのを見ると、㋑

　　】

いま片つかたにうつれるかげを見せたまくば、㋒御簾ごもあおやかに、几帳おしいでたる下より、いろいろの衣こぼれいで、梅、桜さきたるに、うぐひす木伝ひなきたるを見せて、『これを見るはうれしな』と、のたまふ」

㊟【もう一方から映っている姿をお見せになると、㋒何帳もの御簾が清々しく掛かり、几帳の下から様々な色彩の衣がこぼれ出て、庭には梅や桜が咲いているところに鶯が枝を伝って鳴いている光景であったのを見せて、『これを見るのは本当にうれしいことですね』と仰った】

① 傍線㋐　文法的説明をしてみよう。

鋳　　さ　　せ　　て

→ 鏡は［　　］でつくられていた。

② 傍線㋑　口語訳を埋めてみよう。

③ 傍線㋑　どのような姿が鏡に映っていた？

④「鏡」は姿・形を映すだけではなかった？

● 自分の趣味は？

● 自分の得意・苦手なことは？

● 隣の人はどんなひと？

『徒然草』より

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、或時、鏡を取りて、顔をつくづくと見て、我がかたちの見にくく、あさましき事を余りに心うく覚えて、鏡さへうとましき心地しければ、その後長く鏡を恐れて手にだに取らず、更に人にまじはる事なし。

賢げなる人も、人の上をのみはかりて、己れをば知らざるなり。我を知らずして、外を知るといふ理あるべからず。されば、おのれを知るを、物知れる人といふべし。

㋐かたちを改め、齢を若くせよとにはあらず。拙きを知らば、なんぞやがて退かざる。老いぬと知らば、なんぞしずかに身を安くせざる。行ひおろかなりと知らば、なんぞこれを思ふことこれにあらざる。

① 「徒然草」って何年前に、誰が書いた？

成立・・

作者・・

② 物事をよく知っている人は［　　］をよく知っている人である。

③ 傍線㋐「かたちを改め、齢を若くせよ」ではなくて、どうすべきだと言っている？

メモ欄